シリーズ 城

第六十六回

大和郡山城

～大和大納言豊臣秀長が整備した大城郭～

深草 祐一

大和郡山城は、大和の国衆が築いた城を筒井順慶が拡張し、豊臣秀吉の弟、秀長が大規模城郭として整備した、大和国最大の城郭です。豊臣秀吉の立身出世を陰で支え続けた秀長は、紀伊、河内、大和の三カ国、計百万石余の所領を得て大和郡山城に入り、さらに従二位権大納言に叙任されたことから、「大和大納言」と呼ばれました。天下人となった秀吉に唯一異論を述べることができた人物であったといい、もし彼が長命であれば、豊臣が徳川に倒されることはなかったのではないかとも言われます。

木下藤吉郎秀吉の弟小一郎長秀

豊臣秀長といえば、堺屋太一氏の小説「豊臣秀長」等を原作とした平成8年のNHK大河ドラマ「秀吉」において、主要登場人物として光が当てられました。強烈な個性を放つ竹中直人さん演じる兄秀吉のバックアップにひたすら苦労する弟秀長を高嶋政伸さんが演じ、秀吉の立身出世になくてはならなかった人物であることがよく表現されていました。「秀吉」では、晩年に狂気を帯びていく秀吉が描かれずに終わりましたが、後の「軍師官兵衛」では再び竹中直人さんが秀吉を演じ、特に秀長の死後に、誰も止める者が居なくなった秀吉の暴走が熱演され、秀長という補佐役の存在の大きさを感じるものになっていました。

秀長は、秀吉の異父弟とされてきましたが、近年彼の生年と秀吉の実父の没年から父も同じではないかとの説もあるようです。昔の記録はほとんどなく、秀吉が織田信長に仕え、妻おねと結婚した後に、故郷を出て秀吉の家来となったのではないかと考えられています。当初は木下小一郎長秀と名乗っていました（ここでは秀長で通します）。秀吉が出陣する際に留守居役を務めることが多かったようですが、金ヶ崎の退き口では第一備えの大将として戦っており、戦場での経験も重ねていたと思われます。秀吉が長浜城を与えられて城持ち大名になると、城代を務めたり、秀吉の代理として長島一向一揆討伐に出陣したり、羽柴軍の副将的な役割を果たすようになっていました。秀吉が中国方面軍の司令官となり、他方面にわたる出陣が必要になってからは、但馬方面平定の指揮を任されるなど、もう一人の秀吉としての役割を果たしていきます（このあたりの戦史に、現在「天空の城」として有名になった但馬竹田城が登場します。）。この頃、黒田官兵衛に宛てた秀吉の書状には、「その方のことは弟の小一郎と同然に信頼している」といったことが書かれており、逆に秀長への信頼の厚さが窺えます。

羽柴小一郎長秀から大和大納言豊臣秀長へ

中国方面攻略戦では、秀長も一軍の将として各地を転戦し（第34回姫路城参照）、苦労した播磨三木城攻め、因幡鳥取城攻め等を経て（第18回鳥取城参照）、ついに備中に兵を進め、高松城を水攻めにしている最中に本能寺の変が起こります（第22回備中高松城参照）。

山崎における明智光秀との決戦では、秀長は黒田官兵衛とともに天王山を死守し勝利に貢献しました（第60回勝龍寺城参照）。

賤が岳の戦いでは、秀吉の大返しで勝利を収めたものの、佐久間盛政の攻撃で中川清秀を討ち取られたことに対し、秀吉は自分の留守中に軍を任せていた秀長を叱責したといいます（第64回岡城参照）。

織田信雄・徳川家康連合軍と戦った小牧・長久手の戦いでは、秀長は織田信雄軍の監視に当たり、信雄との単独講和の際には秀吉の名代として直接交渉を行いました。この時、長久手において甥の秀次が徳川軍に散々に打ち負かされて帰還し秀吉に叱責されていますが（第50回小牧山城参照）、続く紀州攻め、四国攻めでは、秀長は秀次と共に従軍し、秀次の信頼回復に努めたと言われています。その紀

州攻めでは秀吉の副将を務め、平定後は、その功によって、紀伊、河内2カ国およそ64万石を与えられ、配下の藤堂高虎を普請奉行として和歌山城を築城しました。

そして、四国攻めでは、病気の秀吉の代理として10万を超える大軍の総大将として出陣します。入念に作戦を練って待ち構えていた長宗我部氏の抵抗は激しく、また遠征軍も毛利、宇喜多の合同軍だったため、侵攻が遅れ、心配した秀吉から援軍の申し出が来たりもしましたが、秀長はこれを断り、着実に四国平定を成し遂げました。その功により、さらに大和一国を加えておよそ110万石の所領を有するに至った秀長は、大和郡山城に入り、百万石に相応しい大城郭へと改修を行ったのでした。

その後の九州征伐では、秀吉の本隊が肥後方面から進軍する一方で、秀長は日向方面軍の総大将として進軍しました。そして、高城での島津軍の乾坤一擲の迎撃をはねのけ、撤退に追い込みました（第49回高城参照）。その功により、従二位権大納言に叙任された秀長は、大和大納言と尊称されるようになります。こうして与えられた紀伊や大和は寺社勢力が強い難治の地でしたが、毅然とした対応をしながらも大きな混乱は起きておらず、秀長は内政にも長けていたと評価されています。

秀長の死と秀吉の暴走

秀長は、温厚な人柄で、兄を立てながら家中の調整役を担っていたと言われます。有名な話として、大友宗麟が救援要請のため上洛した際に、秀吉から「内々のことは宗易（千利休）が、公儀の事は宰相（豊臣秀長）が分かっているので、よく相談するように」と言われたと伝えており、天下統一に向けて多くの大名が傘下に入ってくる中で、調整者として頼りにされ、上手く事を収めていたと思われます。一方で、九州征伐の後、余った割高な兵糧を大名達に売りつけようとして秀吉に止められたというエピソードも残っており、派手な秀吉を地味に支えたこの兄弟の関係性が窺えます。

しかしながら、そうした気苦労が蓄積したのでしょうか、大和郡山城に入った頃から、湯治の記録などが見られ、体調を崩すことが増えたようです。そして、天下統一の総仕上げとなった小田原征伐には病のため従軍できず、その翌年に大和郡山城で死去しました。享年52歳でした。大和郡山城には大量の金銀が備蓄されていたといい、連戦する秀吉のために莫大な戦費を裏で工面し続けた苦労人であったことが偲ばれます。人生五十年時代とはいえ、豊臣政権の確立はこれからという時の早過ぎる死で、この後、千利休の切腹、朝鮮出兵、関白豊臣秀次の切腹と、晩年の秀吉の暴走が加速していきました。

その後の大和郡山城

息子がなかった豊臣秀長の跡を継いだ婿養子の秀保は4年後に若くして死去したため、秀長の家系は断絶しました。大和郡山城には増田長盛が22万石余で入り、最外郭の堀と土塁を構築して惣構えの城郭都市となります。しかし、増田長盛は関ヶ原の戦いで破れ、大和郡山城は徳川の管轄下に入りました。いくつかの譜代大名が続き、柳沢吉里が15万石で移封されて後、明治まで続きます。しかし、幕末に大火が発生して大和郡山城の建物群はほとんど焼失してしまい、間もなく明治維新を迎えたため城の修理は中断され、そのまま破却されました。明治期には、二の丸に旧郡山中学校が建てられ、現在は郡山高校となっています。

ただ、巨大城郭の石垣や堀の多くは今もそのまま残されており、石材の少ない大和国での築城にあたり近隣の墓石や石仏等を集めて築造した石垣が観光名所となっています。そして、昭和になって、追手門と追手東隅櫓、追手向櫓が市民の寄付などによって復元されました。さらに近年、長く立ち入り禁止だった天守台の修理が行われ、展望台となっていて、平城京や薬師寺まで見晴らせるようになっているそうです。続日本100名城、日本さくら名所100選にも選定されている大和郡山城をいつか訪ねてみては。

大和郡山城本丸の高石垣